川島雄三の生涯

西暦	元号	年齢	事歴
1918年	大正7年	当歳	2月4日、青森県下北郡田名部町本町（現・むつ市）に、酒類販売兼食料品卸業の川島徳蔵・ヨシの三男として生まれる。
1923年	大正12年	5歳	母ヨシ死亡、享年37歳。
1924年	大正13年	7歳	田名部尋常小学校入学。
1930年	昭和5年	12歳	青森県立野辺地中学校（現・野辺地高校）へ入学。 映画を見ることは禁じられていたが、椅子席のない映画館に隠れて通う。
1934年	昭和9年	16歳	野辺地中学校で映画部を創設。
1935年	昭和10年	17歳	明治大学専門部文芸科へ入学。校友会映画研究部に入部。 後の社会党委員長となる飛鳥田一雄と交流を深める。
1938年	昭和13年	20歳	明治大学卒業。松竹大船撮影所・助監督採用試験合格。松竹入社以降、島津保次郎、吉村公三郎、清水宏、小津安二郎、渋谷実、木下恵介らに助監督として付く。 最初に付いた監督が、深田修造。作品は「大地の妻」だった。
1939年	昭和14年	21歳	島津保次郎監督の下、「愛染椿」「愛染かつら」の助監督をつとめ、助監督同期の仲間から「愛染助監督」と呼ばれる。
1940年	昭和15年	22歳	木下恵介の「花咲く港」で最初にチーフを経験する。
1943年	昭和18年	25歳	監督昇進試験に首席で合格。第一回作品に織田作之助の新聞連載小説「清楚」を希望したことから、織田作之助の知己を得る。
1944年	昭和19年	26歳	松竹の映画監督に昇進。 デビュー作「還ってきた男」（松竹）5月1日公開・発表。
1946年	昭和21年	28歳	「ニコニコ大会・追ひつ追はれつ」（松竹）公開。日本映画初のキスシーンを取り入れるなど、斬新な手法が絶賛される。
1947年	昭和22年	29歳	「深夜の市長」公開。この作品の失敗により助監督へ降格。 大船撮影所で柳沢類寿、西河克己、小林桂二郎らと「泥馬クラブ」という怪組織を結成する。
1948年	昭和23年	30歳	「追跡者」にて監督復帰。 ローカル紙「新下北」に社説で「川島監督に期待する」を掲載。 東奥日報に「日本で最年少の映画監督」と紹介され、注目を浴びる。 川島がシミキン（清水金一）主演の喜劇を多く手がける。
1949年	昭和24年	31歳	「シミキンのスポーツ王」公開。この作品の失敗により再び1年近く制作から遠ざかる。
1951年	昭和26年	33歳	「天使も夢を見る」公開、好評を得る。以降、プログラム・ピクチュアの量産にはいる。 「楽しさ」「明るさ」「ウィット」「スピード」が川島組のモットーだった。
1952年	昭和27年	34歳	「相惚れトコトン同志」公開。初めて助監督として今村昌平が付く。
1954年	昭和29年	36歳	川島雄三、今村昌平、日活へ移籍。
1955年	昭和30年	37歳	川島の日活での第一回作「Iのお荷物」公開。好評を得る。このころより、体質の弱さが次第に表れるようになり、薬漬けの毎日が始まる。
1956年	昭和31年	38歳	川島雄三が自分では一番好きな作品と言った、「州崎パラダイス赤信号」（日活）を制作。「幕末太陽傳」と並ぶ川島の傑作。
1957年	昭和32年	39歳	代表作「幕末太陽傳」（日活）公開。戦後日本喜劇の最高傑作と評価され、日本映画史に残る傑作といわれる。主演のフランキー堺キネマ旬報、ブルーリボン賞主演男優賞受賞。 東京映画に移籍。
1958年	昭和33年	40歳	父徳蔵にほめられることを意識して制作した、「暖簾」公開（撮影：岡崎宏三、脚本：藤本義一）。父徳蔵がこの作品を見て涙したといわれる。
1959年	昭和34年	41歳	傑作「貸間あり」（原作：井伏鱒二）公開。桂小金治に放尿しながら、「サヨナラだけが人生だ」といわせるラストシーンが話題となる。
1960年	昭和35年	42歳	父徳蔵死去（享年81歳）により、田名部へ帰郷。このころより足の不自由さが目立つようになる。
1961年	昭和36年	43歳	「女は二度生まれる」（大映）公開。この作品を始めとする大映の三作品で若尾文子が開眼する。
1962年	昭和37年	44歳	進藤兼人原作「しとやかな獣」、水上勉原作の「雁の寺」（大映）公開。二作品ともこの年の話題作となる。
1963年	昭和38年	45歳	キネマ旬報に「自作を語る」を掲載。 6月11日の夜、芝の日活アパート9階自室にて急死。享年45歳。解剖の結果、死因は「肺心性」と判明。法名　釈雄然 6月16日、遺作となる「イチかバチか」公開。